

対話のことば、ケアのことば

自他が対面してことばを交わす「二人対話」。ケアの現場では、「話す」と「聴く」ことが一つになる。そこで何が起こるのか。「対話のことば」がもつ可能性の一つとして、「ケアのことば」を考えたい。

I 対話のことば

対話は「ディアロゴス」（二つのロゴス）。二つの論理がぶつかり合って争うのがふつう。

→ディベート、論争

対話の空間をケアの場に変えるための条件

(1) 〈あいだ〉（中）の境域 →①

(2) 〈意味〉の表現 →②

〈意味〉としてのロゴスには、ケアの要素が含まれる。

II ケアのことば

ケアする人とケアされる人との〈語る－聴く〉関係には、通常のロゴスにはない性格が表れる。

→〈語る－聴く〉の同時連携

〈沈黙〉と〈祈り〉

〈沈黙〉の意味を「聴く力」によって、ケアの空間が開かれる。→③

相手と競い合うことなく、相手に寄り添うことばから生まれる「二人対話」の世界。

◎ 〈あいだ〉を開く実践

→課題：〈対話の空間〉を〈ケアの場〉に変容させることができるか？

[資料]

1 〈中〉とは何か

「中とはただ二つのものの間にあることをではなく、それが二つのもののれでもなく、そしてそれ故にそれらのれでもあり得ることを意味する」（山内得立『新しい道德の問題点』理想社、1958年、73頁）。

2 〈意味〉としてのロゴス

「ロゴスは存在とも論理とも異なり、〈意味〉である」（山内得立『意味の形而上学』岩波書店、1967年、423頁）。

3 「聴く」ことの意味

「ことばは、聴くひとの「祈り」そのものであるような耳をつてはじめて、ぼろりとこぼれ落ちるように生まれるのである。苦しみがそれをとおして現われ出てくるような《聴くことの力》、それは、聴くものことばそのものというより、ことばの身ぶりのなかに、声のなかに、祈るような沈黙のなかに、おそらくはあるのだろう。その意味で、苦しみの「語り」というのは語るひとの行為であるとともに聴くひとの行為でもあるのだ」（鷺田清一『「聴く」ことの力』阪急コミュニケーションズ、1999年、165頁）。

[概要]

執筆中の『哲学は対話である——15の問い』にのっての「応用問題」。「対話」の一種として、「ケア」を扱う試み。ふつうに考えれば、対話は対等同格な人間同士の言語行為。それに対して、ケアにおける「ケアする人—ケアされる人」の関係は、非対称的（必ずしも対等ではない）。しかし、「二人が対面して言葉を交わす関係」と考えることによって、ケアを対話の一種として捉える視点が成立する。

I 対話のことば

「ディアロゴス」（二つのロゴス）の原義からして、言葉を交わす二つの主体は切り離され、向かい合う関係に立つ。二つの言葉（論理）がぶつかり合う場面では、しばしば言い争い（→ディベート、論争）が生じる。ディアロゴスに由来する「弁証法」（ディアレクティク）は、勝つか負けるかの「闘争の論理」。

風土学のテーマは、〈あいだを開く〉。対立する二者の〈あいだ〉（中間）をいかに開くかがポイント。→〈中〉に焦点化した『〈中〉のロゴス』（9月刊）。二者の〈あいだ〉は、二者の「どちらでもなく、どちらでもある」境域。通常の二元論のロゴスでは、それを表現できない。→①

二元論を超える立場から眺められたロゴスは、〈意味〉の世界。→②

ケアの場面は、（ケアする人—ケアされる人）の〈あいだ〉。そこで発せられる言葉の〈意味〉を、双方がきちんと受けとめることによって、「対話のことば」と「ケアの言葉」は、一つに重なり合うと考えられる。

II ケアのことば

ケアする人とケアされる人との〈語る—聴く〉関係には、通常のロゴスにはない要素が含まれる。

〈語る—聴く〉の同時連携 →二人の〈あいだ〉が開かれる

〈沈黙〉と〈祈り〉 →ことばをこえた〈意味〉の表れ

沈黙の意味を「聴く力」によって、ケアの空間が開かれる。→③

ケアの場面对話の文脈で言い換えるなら、それは相手と競い合うことなく、相手に寄り添うことばから生まれる「二人対話」の世界となる。

◎ 〈あいだ〉を開く実践は、ケアの場面にそのまま当てはまる。

→課題：〈対話の空間〉を〈ケアの場〉に変容させることができるか？